



中国の新しい体制と毛沢東以後

— 北京への旅のあとで —

東京外語大学助教授 中嶋嶺雄

ただいまご紹介にあずかりました東京外語大学の中嶋でございます。

昨年、本日の講演会へご招待いただくことになったときは、中国の新しい世界戦略といった問題を中心に、中国の現状と将来の展望をお話してみようかと思つたのですが、この一月中旬、ご承知のように全国人民代表大会が開かれました。非常に長い間の懸案でしたが、それが開かれた、十年ぶりの開会でございます。いわば中国の新しい国家体制というもの、ここに発足したわけでありまして、このことはある意味では文化大革命から「批林批孔」運動という中国の激動の政治過程に、一つの結節点を設けた画期的なものだと思うわけでございます。

もう一つ、私自身が実は昨年の十二月二十六日に日本を立ちまして、モスクワに一週間、それからシベリアを経由いたし

まして、モンゴル人民共和国のウランバートルに一週間、それから汽車で北京まで三日間、ゴビの砂漠と内蒙を越えまして中国に入りました。北京に一週間滞在いたしましたので、つい先週帰ってきたばかりでございます。そんなことがありましたので、本日は、今回の旅行の印象をまじえながら、当面の諸問題をお話してみようかと思つています。ただ私自身の今回の旅行が思いがけずこういうコースをたどることができまして、しかも中ソ対立下の今日、専門研究者として初めてこれら三カ国を通つたということでございますけれども、私にとつても大変な旅行であつたために、旅行の整理がまだついていません。しかも、帰国早々全国人民代表大会の諸文献が発表されました、本日はまた新しい憲法が発表されたわけでございます。そうした状況であるだけに、必ずしも十分な整理ができておりませんが、このことはまた逆に、私自身のホットな

印象をお話する機会にもなりますので、ともかく、しばらくのご静聴を願いたいと思う次第であります。



今回、私が単身こういう旅行を試みましたのは、実は中ソ対立、あるいは中ソ関係を歴史的にさかのぼって研究しておりました、その一環としての現地調査をおこなおうとした次第であります。どうも一般には一九五六年のソ連共産党二十回大会に端を発した中ソ論争以降の問題がクローズアップされ、幾つか研究し尽くされているわけでございますけれども、その前の、いわば中ソ友好期、ある意味では一九四〇年代から第二次大戦の終戦前後、あるいは一九五〇年代初頭ぐらいの時期であります、この時期についての研究はまだ全く未開拓のままです。しかしながらこの時期こそ、実は中ソ関係が幾つかの問題をはらんでいたのではないかと、そのことが今日のような中ソ関係の大きな源泉ではないかという問題意識から、特にアジアの冷戦が定着してゆく過程での中ソ関係を調べるためにそのいわば実態調査といたしまして今回出かけたわけでございます。

ということになりますと、どうしても中ソの間にまたがる広大な緩衝地帯、あるいはこれは中国のことばでいえば、む

しろ中間地帯ということばを使つたほうがいいと思えますけれども、こういうものの存在が、実は中ソ両民族の歴史的な対立に、幾つかの問題をもたらしていたように思うわけでございます。たとえば外モンゴルの帰属をめぐりましても、ご承知のようにこれは辛亥革命の時期以来、常に中ソの間で幾つかの争いがありました。また同時にそういう過程の中で、モンゴル自身は中ソ両大国の当時の国際関係の思惑のままにゆれ動いてきたわけでございます、このような経過はたとえば一九四五年のヤルタ密約においてもあらわれています。ヤルタ密約で、外モンゴルをはじめ承知のとおり旧満州、特に旅順、大連の問題など、いわゆる極東条項がヤルタ密約の中にはめ込まれて、そのことがあったゆえに密約の当事国である米・ソが、将来のアジアにおける勢力角逐を意識して、すでに冷戦を開始していたのではないかと。この場合に、やはり中ソ関係が非常に大きな意味を持ったのではないかと。いうような問題意識もあつたわけでございます。ご承知のように、ヤルタ密約の存在を知らされて非常に驚いた蒋介石政府は、急遽、宋子文をモスクワに派遣しスターリンとご承知のような交渉をおこなわせます。

しかしながら、そのときもスターリンの非常に傲慢な態度のもとで、中国側にとっては非常に不本意ながら外蒙の問題をはじめ、旧満州の権益の問題、具体的には長春鉄道（旧満

鉄）あるいは旅順、大連港の問題を含め、いわば中国側は譲歩せざるを得なかった。このことは、やがて一九五〇年の中華人民共和国成立直後の、毛沢東訪ソによる中ソ会談に連なるわけであります。おそらく毛沢東にとりましては中国革命の勝利という大きな実績を背景に、今度こそはソ連が中国共産党なり毛沢東をあたたく迎えてくれるのではないかと、そういう期待のもとにソ連を訪れたわけでしょうが、最近明らかになってきているところによりますと、その時のスターリンの態度は、五年前に宋子文に示した態度以上の冷酷なものでした。

この辺のことは実は日本でも最近話題になっている「毛沢東思想万歳」などの毛沢東の未公開著作をはじめ、随所に新しい材料が出てきているわけです。同時に、当時毛沢東は、いわゆるアメリカとの関係をいろいろ考えていたわけですし、同時に「中国チトー化」政策ともからんだアメリカ側のさそいもあり、米中関係を図式的な理解では理解しがたいような流動的な状況が、当時すでにあつたわけでございます。この点についてもアメリカの外交文書が一九四七、八年まで最近解禁されまして、幾つか新しい資料がみつかつてきている。こうした状況の中で、中ソ関係を、もう一ぺん根本的に洗い直してみる必要があるのではないかと、そういうような観点から私自身最近幾つか研究を始めているわけでございます。

ます。

毛沢東はご承知のように、コミンテルンあるいはスターリンの中国共産党に対する態度が、中国革命の段階でもいかに冷ややかなものであつたかということも十分承知していたわけですが、やがて向ソ一辺倒宣言を發して、みずから代表団長となってソ連に乗り込んでいったわけでございます。しかしながら、ご承知のように中ソ友好同盟条約の締結までに約二カ月半を要したわけですし、この間建國間もない毛沢東が、それほどの期間、国を留守にしたという異例な事態をみましても、この中ソ友好同盟条約——これは実はご承知のように、アジアの冷戦の意味での起点にもなるわけですし、これに対抗する形で、戦後のアジアの国際秩序が形成され、サンフランシスコ体制から日米安保体制に至るまでの、日本にも非常に直接関係のあるアジアの国際環境が規定されるわけでございますけれども——以後の中ソの一枚岩的な友好を誇つた当時の中ソ関係そのものにも、非常に多くの問題があつたことがわかつてきつたわけでもあります。

ここでちょっと具体的な経過を振り返つてみましても、たとえば当初毛沢東は、ロシア語に堪能な政治秘書役の陳伯達を伴つて訪ソするわけですが、やがて二月二十日には（訪ソしたのはご承知のように十二月でございますが）、周恩来——当時の政務院総理——以下、この間なくなりました李富春——

彼は東北人民政府の副主席でした——たちをモスクワに呼び寄せております。つまり一方で、当時東北人民政府の主席は高崗でして、前年の七月には高崗はスターリンとの間に独自の貿易協定を結んでおるわけですから、東北をめぐる中ソ間の幾つかの懸案の処理のためにも、李富春を呼び寄せざるを得なくなつた。さらに一月の終わりになりますと、新疆の副主席サイ・フディン(賽福鼎)を交渉に参加させているわけでございます。

こういう経過をちょっと見ただけでも、当時の中ソ関係には、すでに出発点において幾つか問題があつたことが推察できるわけでございます。その場合、常に問題になりましたのは東北であり、あるいは新疆、そしてモンゴルでした。こういうことを考えてみますと、この問題はさらに朝鮮戦争において、中国がいかにソ連の朝鮮戦争戦略に批判なり不満を持っているかといふことと考え合わせても、再検討する余地が幾つかあるように思うわけでございます。現にこれらの問題については、毛沢東も最近幾つか告白しているわけでした。たとえば一九六二年の中国共産党十中全会では、世界史の教科書でさえも中ソの一枚岩的な団結のシンボルだといっている中ソ友好同盟条約について、スターリンはなかなか調印しようとしなかつた、二カ月の談判を経て、最後にしぶしぶ調印したんだ、ということを行っているわけであります。この

ということは、今日の中ソ関係そして中蒙関係を考えますと、非常に困難なものがあつたわけですけれども、これは幸いにして実現いたしました。中国自身、十分承知の上で私の訪中を許可してくれました、北京に一週間滞在することができました。その間は、ご承知のようにウランバートルから汽車で国境のザミンウデまでいきまして、そこから二連という中国側の国境駅に入り、そこから内蒙古を通り、集寧、大同、張家口を経まして北京にたどりついたわけでございます。

今回の旅行を通じて考えたことは、やはり一つにはモンゴル民族が歴史的に持っていた、非常にダイナミックな流動性と申しましょうか、つまり遊牧騎馬民族としての、ジンギスカン以来の流動性というようなもの、そしてそれが、いわば漢民族そしてロシア民族双方を征覇したという、この非常に大きな歴史の痕跡ですね、このことがどうも今日の中ソ関係を考える上で、ロシア民族、漢民族双方に幾つかのイメージのいたずらをもたらしているのではないかといふことを、まず感じた次第でございます。と申しますのは、漢民族は直接ロシア民族によって征覇されたことはないわけでございます。確かに清朝が支配していた沿海州その他を、ツアアのロシア帝国が奪つたということは事実でございますし、あるいは漢民族の側からすれば、外蒙さえもソ連が奪つたというふうに見るわけでございますけれども、しかしながらそういう部分

ことについては、すでに毛沢東は当時の内輪の非公式の会議では、五七、八年当時から幾つか告白しております。

たとえば五七年一月の「省、市書記会議での挿話」とのなかで「われわれはスターリンと異なつた意見を持つていた。われわれは中ソ条約を調印しようとしたが、彼はしようせず、中国長春鉄道を要求したが彼は返してくれない。だがトラの口の中にある肉はやはり引っぱり出せるものである」と語り、ソ連を、トラにさえたえています。

こういうことを幾つか見てみますと、今日の中ソ関係を考える上で、従来のイデオロギー論争から発した国益上の対立という図式よりも、もっと深いものがすでにそこに存在していることを思い知らされるわけでした。このことはアジアの冷戦、あるいはひいては戦後日本の出発というふうな、あるいは大きなアジアの国際環境の形成にも、非常に意味をもつていたといふふうに考えざるを得ないわけであります。特にこの場合に、中ソ間に非常に広大な緩衝地帯があるということの意味は大きい。私はかねてモンゴルあるいは内蒙古というふうな地域へは、中国なり中ソ関係を研究しているものとして、一度そこを通つてみたいという夢がありました。しかしながらモンゴルへもなかなか入りにくいわけですが、幸いにして今回、多方面の御協力を得ましてモンゴルを訪問することができました。さらに、このモンゴルから中国へ行く

的な争奪あるいは辺境地帯における争奪はあつたにせよ、ロシア民族が中原を征覇したといふことはない。まさにそれは、元朝に代表されるジンギスカン以来の、フビライ汗以来のモンゴル民族がおこなつたことであります。

一方、ソ連に行きますと、博物館に行つてもご承知のように、たとえばモスクワ大公がモンゴル征覇といふことをいかにおそれていたか、そして実際にモスクワが征覇されました、今日ではモンゴル人とカタール人がいかに野蛮で猛であるやを証明する、幾つかのことわざがあるくらいでございます。まして、ロシア民族の側からすれば、漢民族によって直接征覇されたことにはないにもかかわらず、このモンゴル民族によって征覇されたといふ体験が、南からの脅威、あるいはロシア民族の南方に強大な統一国家ができるのを常に妨げようとする、そういう民族的、歴史的な衝動につながっているのではないか。漢民族の側からすれば、ロシア民族に征覇されたことにはないにもかかわらず、それが北からの脅威といふモンゴルのかつての歴史的な事実とダブリまして、いわば北狄、北方の異民族の侵入を阻止し、あるいは北方からの脅威に常に対処しようとする、といふことになつていのではないかといふ気がいたします。中ソ関係を考えるうえでモンゴルといふのは、たんに中ソの中間の小国としての意味をもつだけなのでは決してなく、このように歴史的にも無視できない大

きな意味を持っているのではないかと、三日間、そこを汽車にゆられて通りながら感じてきたわけでありませう。しかも、このモンゴル地域の歴史は非常に流動的でした。かつてはご承知のように、あの辺は馬賊が跳梁したところでございますし、あるいは日本の満蒙政策、ロシアのモンゴル政策、あるいは張作霖の政策等々いろいろなものが交錯しあひまして、常に内蒙、外蒙をふくめ、ときにはモンゴル民族の統一運動もあつたりして、幾つかの列強の利害が角逐してきた流動的な歴史の舞台でございます。

考えてみますと中ソ双方の間には、そういう広大な中間地帯、緩衝地帯があるわけでした、今日中ソが国境を接して対峙しているとか、北京とモスクワが深刻に対立しているとはいいながらも、両国の首都が近接しているわけではなく、非常にそれは離れている。その間にむしろそういう中間地帯がモンゴルから新疆に至るまであるわけでございます。そうしますと、どうもこれは、中国とソ連という巨大な大男の間に一枚の大きな絨氈があつて、それを引っぱり合つてるといふ感じですね。しかもこの絨氈は、常にあちこちに動くわけですから、ただいま現状におきましてはソ連がそれを引き寄せている。ということ、中国にとってはどうしても許せないという感情があるのではないか。このような地政学的意味を考えてみる必要があるのではないかと、私を、私の今

かわらず、かなりそこにはある一定の共通項を見出すことができるような気がいたしました。にもかかわらず、文明とか民族性という点では、全く三つが違ふというそのことのギャップ、そしてそういうギャップや摩擦を持つ三つの民族国家が、ユーラシア大陸の東部を縦貫して存在しているという現実。こうした現実がもたらす一種のダイナミズムみたいなものは、どうも日本人みたいなホモジニアスな体質の中で、自己完結的な民族として存在してきた者にははかり知れないものがあるような気がいたしました。

以上、全般的にはこのような印象を持ったわけですが、ソ連については、いままざら私がかここで新たに言う必要ございません。ただ今回もソ連に行きまして、中ソ関係、あるいは毛沢東以後の中国ということ、ソ連の学者——私は主として学者と会つたのですけれど——も、非常に気にしておりました。しかもソ連は今日中国に関する生の情報なり第一的な資料なりが少ないものですから、中国情勢について非常に多くのことを私などに聞きたがるわけでございます。いずれにしましても今日のソ連は、毛沢東あるいは毛・周以後の時代というものに、非常に大きな期待をかける、といえるような気がいたします。そしてソ連の中国関係者を見てみましても、毛沢東路線を批判するという点では共通しているわけですが、その中にもほぼ二つの潮流があることを今回確認し

回の旅行を通じまして教訓的に感じたわけでもあります。そしてこと国境とか領土の問題に関する限り、北京政権も台湾政権も、この点では完全に一致するわけですから、このことは、中ソ関係が単にイデオロギーとか国益とかいうことを越えた、まさに民族の問題として歴史的に存在してきたことを示しているように思います。

ところで、今回は厳冬期でしたので、非常に寒い旅行でした。ウランバートルは夜の戸外は零下四十度くらいになりまして、日中でも零下十五度くらいでございます。まあそういう中を、いまのような問題意識を持ちながら通つてきたわけでございます。そこで幾つかのことを感じたわけですが、ともかく一つには、ロシア民族なり今日のソ連というものの持っている民族性、あるいは文明性というようなもの、それからモンゴルも中国もそれぞれ持っているわけで、そうした民族性、文明性といったものがそれぞれ三者において非常に違うことでもあります。しかもいずれも社会主義を唱えながら、この違いが非常に大きいこと、この点を私自身どういふふうに整理していったらいいか、今後の宿題でございます。社会主義として三つの国を見た場合に、ちょうど私は同時に三つの国に一週間ずつ滞在してきたわけでした、もちろん短期の旅行者で、それぞれの首都にとどまっただけでございますけれども、社会主義として見た場合には、今日の理論闘争にもか

てまいりました。一つは、いおぼ今日のソ連の体制と申しましようか、政府の中国批判をむしろそのままいくような、いわば体制的な中国観でございます。これはたとえば、科学アカデミーの極東研究所なんかに代表されるような気がいたしましたけれども、こういういわば体制的な中国観は、とにかく中国を批判しさえすればいいというような感じがいたしますね。

これに対して、もう一つの科学アカデミーの東洋学研究所、つまりソビエト東洋学というような長い伝統を持っているところ、それから最近注目されるものとして、情報科学研究所という非常に膨大な科学アカデミーの機関がございますけれども、このようなところの中国研究所はもつとリベラルに中国を考えよう、毛沢東路線に対する批判という点では一致しているけれども、何でも中国を批判しさえすればいいという態度ではなく、もう少しリベラルにものごとを考えていこうとしている。これらの研究者の存在はある意味でソルジェニツインが突きつけた問題などに共通するものを持っているように思うわけでございます。そして、また同時にこれらの研究者は、たとえば六八年のチェコに対するソ連の軍事制圧の問題などについては、内心じくじたるものを感じているというふうには私はいふわけでした、このような問題が、中国の将来の転換の中で、どういふふうにはソ連の側から問題提起されてくるかということを見ておく必要があるのではないかとと思

いました。

次にモンゴルでございますけれども、実はモンゴルというのはすでに社会主義革命を達成してから五十年ということがいわれまして、ついこの間、革命五十周年の記念大会があったわけでございます。しかしながら、どうも私の実感としては、はたしてその一九二〇年代初頭の革命を、社会主義革命への第一歩というふうにみなしていいかどうかと思われるほど、今日のモンゴルの状況というものには、幾つかやっばりきびしい問題があり、そこには著しい後進性があるという感をぬぐうことができません。これはモンゴル人にとつては心外なことかもしれませんけれども、かつて歴史上あれほど多くの問題を提起したモンゴル民族、そしてまた内蒙との統一を含むモンゴルの独立というような方向の中で、幾つかナショナリスティックな反応を示したモンゴルでしたが、今日そういう芽がほとんど見られずに、ソ連の圧倒的な影響下におちいつてるといふことの持つ意味だろうと思えます。

私はその点では、モンゴルはよくいわれるように「ソ連の第十六番目の共和国ではないか」という印象を、どうしてもぬぐうことができませんでした。目に見えるだけでもあちこちにソ連人がいる、それから国境地帯まではソ連の基地がたくさんありますし、ソ連兵が至るところに進駐していてモンゴル兵と同じぐらいの数のソ連兵を見るわけですね。最近、

ルのきびしさは生活の面でも相当なものであるように思いました。そうであるがゆえに、モンゴルでは写真をとることがものすごくきびしい。

私自身も、ずいぶんひどい目に会いましたけれども、たとえばオーエン・ラチモアのように、モンゴルを世界に紹介している。モンゴルにとつては非常に重要な学者でさえも、モンゴルの青空市場の写真をとることができないのですね。しかも、ウランバートルの青空市場を見なければ、モンゴルの生活実態というものはわからない。くつの片方であるとか、古いビンであるとかライターの古くなったのとか、そのくらの品物が板の上に数点並べて売られているのです。野菜や果物はもちろん少ないわけですから、みかんを一つ買うのに行列をしているという状況、それから羊の肉やミルクが牧畜遊牧国家であるにもかかわらず、非常に欠乏している状況などは、やっばり想像を絶するものであったように思っています。私はむしろモンゴルにかなり同情的な心情をもって帰ってきたわけですが、そういう状況であるだけに、いわば「小国の大國主義」と申しましょうか、非常に外国旅行者に対してはきびしい点検をいたします。国境を通過するときにも、なぜおまえは中国に行くのかという訊問はもとより、品物の検査、手持ち外貨の検査もものすごく嚴重でして、この間ある新聞記者がウランバートルの革命五十周年を取材にいったと

中国で「歴史研究」という雑誌が新刊されて、その中で中国側は「モンゴルにおけるソ連駐屯軍を撤退させよ」といっているわけですが、この点では確かに中国のいうこともよくわかるわけで、今日のモンゴルは、「ソ連の第十六番目の共和国」ではないか。私はかつて中央アジアのウズベック共和国などにも行ってみましたけれども、あの辺で感ずる状況とモンゴルとを比較して見た場合に、ほとんど同じか、むしろモンゴルのほうがソ連の影響力・滲透力が大きいような気がいたします。もとよりこれはモンゴルにとつては、いわばどうしようもない宿命かもしれません。彼らはいまジンギスカンのことなど持ち出しますと、それを決して民族の英雄とはいいません。むしろ公式的に「ジンギスカンは他民族を制圧した抑圧者であった」というふうには否定するわけですね。そこで、「中国では秦の始皇帝やジンギスカンさえも毛沢東がたたえているではないか」というようなことをいってみますと、非常にいやな顔をするわけですが、ともかくナショナリズムというようなものが、今日ほとんどどこかへ消えうせてしまっているという印象を受けたわけがあります。

一方、一般にわれわれはモンゴルといえますと草原とパオ（包）であるとか、草原の革命とか、日本人の持っている幻想、ないしはロマンチズムを満足させる対象として、非常に幻想的なイメージを描くわけですが、実際のモンゴ

きにも国境で全部フィルムを抜かれたそうです。しかもその新聞記者はモンゴル外務省から取材のために招待された記者であったにもかかわらずフィルムを抜かれたり、くつの底まで調べられたという話を聞いておりまして、私自身も覚悟はしていたのですが、ともかく嚴重でした。お弁当の中で調べるといふような状況でして、二時間以上にわたり汽車のコムパートメントの中に七人ぐらい税関吏が入ってきて、ものすごく嚴重な検査をします。現在のように悪い中蒙関係のなかで私がモンゴルから中国へ行くということは、まるで敵地に行く「裏切り者」といふような感じなんです。決してそうではないということを十分説明し、日蒙友好の必要性を説いて、ようやく今日は特別だといって中国側に出ることを許されたわけでございます。

そういうモンゴルでございますので、今日、中国に対する感情はものすごく悪い。これは中国に行きますと、一九六〇年にソ連は援助を打ち切り、技術者を一せいに引き上げてしまった、いかにソ連はけしからんかということはいいますね。ところがモンゴルに行きますと六四年に中国が援助を中止し、技術者も全部引き上げてしまった、いかに中国はけしからんというわけでした。ここにも中・ソ・蒙という三国の複雑な関係があらわれています。中国にはソ連に対する怨恨があるとすれば、モンゴルにとつてはやっばりあの清朝のモ

ンゴル支配以来の怨恨というものが、やはり今日の中国に対してもつながっているように思うわけでございます。そういう状況ですが、厳しい国境検査のあとだっただけに中国に入りますと、ほんとうにホッといたしました。まさに空気の希薄なところから空気のあるところへ帰ってきたようにホッとするわけでございます。私でさえもそうですから、ふだんまあソ連にいった人が大体反ソになり、中国にいけば親中派になるというのはまさにそのとおりでして、もう国境を越えたとたんにガラッと態度が変わるわけでございます。こうして今回私は八年ぶりで中国を訪れたわけでございます。前回は文化大革命の激動時の一九六六年の十一月でした。前回は孫文生誕百周年記念の訪中代表団の一人として訪問したのですが、そのときの印象に比べますと、とにかく中国は落ちついていきます。

この八年間の変貌というのは、非常に大きなものがあるやうな気がいたします。とにかく町は静かですし、かつて私が行った時期があまりにも激動のさなかであり、たとえばどこにでもデモ隊がいたり、紅衛兵がワイワイやってたわけですね、そして「東方紅」であるとか「大海の航行は舵手による」というような毛沢東讃歌がいたるところで聞こえてくる。そして「毛沢東語録」がどこでも朗読され、踊りと歌でやるというやうな、ああいう光景はもしまつたでございます。

たけれど、今回は耕うん機なども非常に多く見ることができました。洋服なども、人民服ではありませんけれども、かなりきれいなものを着ている。そして全般的に、外人を接待する態度というものも、たしかに中国の場合非常にいいわけでございます。過度にサービスするというようなことはなくなっておりまして。その点でも、まあ非常に平常になったということですね。それから東風市場であるとか、東単の市場などを見ましたけれども、これはモンゴルを通ってきたせいとか、とにかく中国には品物が多いのには驚きまして、品数もふえている。それから、日曜日の頤和園とか故宮などは、おのぼりさんや家族連れでにぎわっている。同時に、以前に比べて、トランプなどが流行しているのと同じように、手ばなをかんだり、たんを吐く人もたくさん見える。

これらのことを総合してみますと、やはり中国はある意味で普通の中国に戻りつつあることだと思えます。ともかくかつて文化大革命のときと比べて、その変化が非常に著しいものだということを感じたわけでございます。

そしてもう一つ、非常に大きな特徴として、今回「批林批孔」運動をずいぶん私も気にしておりましたものから、一週間の滞在でしたが、あらゆる機会をとらえてその問題についてもいろいろ観察してまいったわけですが、その「批林批孔」運動を学習しているというやうなものを、つい

せん。私は三日間汽車に乗りまして、その汽車は国際列車になる一等寝台車だけは中国の列車でして、服務員は中国人でした。私がモンゴル側に盛んにいじめられるものですから、中国人服務員がすっかり同情してくれまして、とても親切にしてくれましたけれども、お客は、私ともう一人ブルガリアの外交官が乗っているだけでその外交官は言葉の問題もあって部屋にとじこもりつきりでしたが、私はしばしば彼の部屋にいたりして仲よくなったわけですが、ひまがあればトランプをやっていました。そして、ときには小説を読んでいた。文化大革命のときのような、語録や毛沢東の著作の学習ではないわけです。

北京のホテルの服務員もそういう状況でして、そのような変わりぶりにも驚いたわけでございます。まあそれだけに、人の表情などを見ましても、よく中国にいつて表情を見てきて明るいという、それは一方的だというふうに言う方もあるわけですが、そして私自身はかなり中国にきびしい見方をしていますが、その私自身が見てきてもとにかくみなんびりして落ちついた表情をしている。八年前と大ちがいです。それから自転車なども、八年前に比べると非常にいい自転車、新車が目立つわけですね。八年前には私自身の経験では、三週間ばかり中国各地をまわったのですが、農村などで実際に駆動しているトラクターを見ることができませんでし

に見ることができませんでした。つまり、言ってみれば中国は非常に平常化したと同時に、文革当時の「政治第一」という状況から「脱政治」への雰囲気、非常に明白だということとです。この潮流は、もはやとめどもないように思うわけでございます。中国は、そういう意味で平生に戻った。そして同時に、古いものがそのまま残っているということも、もう一つ今回再確認したところです。八年前にくらべて今回は一人で北京に滞在していましたので、かなり自由にあちこち見ただけですが、ご承知のように北京は、天安門前広場とか長安街だけを見て帰ってきたら、それは確かにもうたいへんすばらしい国なのです。大体政治家の方々などは北京空港から車に乗って、北京飯店へ行き、非常にりっぱに新しくできたこのホテルに泊まられて、あそこは人民大会堂などで中国要人と会ったり、明の十三陵や八達嶺の万里の長城を見物したり、一つか二つの人民公社を見学したりして、すべて車に乗って表向きのコースをたどって帰ってこられるわけですね。

だが、これだけで北京を見てきたといつて中国を語ることはたいへんな大間違いでございます。私がいま申し上げましたように、たしかに北京の生活その他がよくなっているわけでございますけど、同時にたとえば前門外から琉璃廠一帯にかけての下町は非常にいいわけです。だけど一歩表通りから中へ入りますと、全く昔の——私は解放前は知りませんけれど

ども——そしてまたわれわれの感覚からすれば目をおおうばかりの、古くてきたない街並がそのままあるわけです。皆さんもし行かれた場合には、その辺をぜひごらんになっていただきたいと思います。

それから北京駅ですね、北京駅は解放後できたもので大変立派ですけれども、北京駅の前にある大通り、長安街を隔ててまっすぐ北京駅にぶつかる通り、朝陽門南小街ですね、それからあの東西のあたり一帯。これはまあ北京の中心に近いわけです。しかしながら、この中心部でさえこの辺を見て歩いただけでも、おそらく全然昔と変わっていないのではないかと。人がやたらに多くて、ある意味でものすごくきたなくておくれが目立つ。それから今回地安門から鼓楼の近く、旧鼓楼大街あたりも歩きましたが、こういういわば北京の下町などに行きましても、それはやはりわれわれの感覚からすればまだまだ中国というのはほんとうに発展途上国だと思うところが残っているわけでございます。表通りだけでなく同時にそこら辺も見えてこないといけないわけで、やっぱりその実態を見ますと、非常に胸の中が痛むものがあります。中国というのは確かに躍進しているのですけれども、その反面とてつもない後進性というものを背負っている現実を、知らされざるを得ないような気がするわけでございます。ですから、中国自身はわりあいフラクに、みずから発展

ころもあれば、部屋も違うわけです。こういうことが、一体中国の民衆に将来どういう影響を与えていくのかということ、は、やっぱり大きな問題のような気がします。それだけに「批林批孔」運動などが展開されねばならないのかもしれないけれども、その「批林批孔」運動は、先程申しましたように、どうも幹部の間、知識人の間の運動であって、一般の民衆の間にはたしてどれほど定着しているのかという問題があるような気がいたしました。

そんなようなことをいろいろ感じてまいったわけですが、そういう状況の中でちょっと意外であったことは、それほど中国が落ちついているにもかかわらず、博物館や図書館などが全部閉鎖されているということですね。私どもは研究者でありますから、たとえば図書館が見たいのですが、これは一切立ち入ることができない。同時に歴史博物館、革命博物館、革命軍事博物館その他一切まだ入ることができないというのは、おそらく文化大革命以来ずっとそうだそうですか、やっぱりそこには「批林批孔」運動にも関連した幾つかの解決すべき問題が残されているのではないかとというような気がいたします。ともかく、古いものと新しいものというのが、ある意味での大きな断絶をもって共存しているのが、現在の中国でありまして、しかも中国では北京が窓口でありショーウィンドーでありますから、そのショーウィンドーの

途上国であるということを使うわけですね。ところが、おそらく向こうにいったら、表通りだけを見て歓迎されて帰ってくる日本人の方にむしろ問題があるわけですし、ほんとうに中国はもうすべての面でばら色の天国であるかのように感じるのでしょうね。そこに大きな誤りがあるような気がするわけでございます。

それからもう一つ北京で感じたことは、第三番目の問題になりますけど、最近確かに外交関係が多面的になり、いろいろ世界との交流が多いために、北京に来る外国人が非常に多くなっていることでございます。現に、日本も国交回復以来、外交官はじめかなり多勢いるわけですね。そうしますと、そういう外国人たち、あるいは外人のお客さんは一流ホテルに泊まり、あるいは三里屯などの高級アパートに住み、とにかく一般の民衆とは隔絶した社会に住んでいるわけですね。ご承知のように、外国人のための友誼商店なんかも非常にっぱなものがあつた。決して一般民衆と一緒にではないわけですが。料理屋なんかでもちょっとした小さな食堂に入つて中国人たちと一緒にすわりたいのですが、それは決してできない。必ず外人は外人専門の高級なところに連れていかれるし、たとえば昔の東来順（現在は民族飯店といっている）にしましても北京烤鸭店にしましても、豊沢園にしましても、中国人が入るところとわれわれが入ることは入口もちがうと

中においてさえそうであることを確認した上で、あの広大な全中国を、われわれ見渡してみることがあるかと思つています。とにかく、最近では中国にいられる方も非常に多いわけですし、皆さん方の中にもしょつ中行かれていらっしゃる方もおありかと思つています。北京の見聞記などをお話しても意味がないのかもしれないけれども、変わらなるところはほんとうに変わつていないわけですね。私は今回ちょっと時間があつたので、王政井を北に登つてからちよつと入つた東廠胡同あたりを散歩しました。私がなぜそこに興味を持ったかというのは、そこには現在中国科学院の近代史研究所があるわけです。そして片一方の、王政井を北上した大通りに面したほうには、科学院の考古学研究所があり、そして科学院の図書館があるわけですね。ここはかつてご承知のように、黎之洪が住まっていたところですし、日本がかつて対支文化事業部に使つたところですし、そして胡適が、国外に出るまでそこに住んでいたところですから、そういう意味があつて私は以前から、ぜひ行ってみたいと思つておりました。おそらくそこなども全然変わつていませんね。槐樹の木が十本あるはずなのが六本しかなくなつたんですけども、それ以外はおそらく皆さん方が往時行かれた北京と、その点では全く変わらない北京がそこに残っているわけでございます。そういう意味でも

中国とは、やはり、まさに発展途上国であるという認識を、まず持つ必要があるのではないか。

そういう中国が、ご承知のように最近懸案の第四期全国人民代表大会を開催いたしました。この点については私が北京に在る間に、すでに重要な会議が開かれているらしいことがわかりました。まず中国に国境を越えて入ったのは一月八日でございますけれども、国境を越えて北京に入ったときには、一等寝台(軟臥車)は一つしかついていなかったわけですが、ところが、北京につきますとそれが二両になっていました。普通の中国人たちは一等寝台に乗りませんから、見えますと北京駅いかにも幹部然とした人がたくさんおりてくるわけですね。汽車は夜中に長い間集寧にとまりましたから、集寧とか大同とか、あるいは張家口あたりで代表がそれに乗ってきたんじゃないかという気がしました。

それから、たとえば一月十三日ですけども、民族飯店に泊まっていた日本の商社員たちが、全部新橋飯店に移されました。また友誼賓館には日本航空の常駐社員が泊まっているのですが、その友誼賓館に続々地方代表らしいお客が入ってきました。それから旧鼓楼大街ですね。この鼓楼近くの町を歩いてみますと、今日の北京にはいかなる壁新聞もないのですけれども、その一帯だけ非常にはなやいだスローガンが張ってあるわけです。ちょうど庭がある玄関口のところに「社会主義

命のときと比べ過ぎているのかもしれない。しかしながら、全般的にどうも脱政治、脱文革という状況がまさに潮流であろうと思うのですね。そういう潮流の中に開かれた全国人民代表大会であったのではないか。このことは、いわば中国が国家体制あるいは官僚機構というものをその方向で整備しつつあるということでありまして、今回の全国人民代表大会は、ある意味では官僚体制の再確立を意味するのではないかと気がいたします。周恩来、鄧小平、張春橋は、いずれも、実務的能力のある行政官僚あるいは党官僚でして、それらの人たちが大きな役割を演じつつあるということですね。

私は、今回の全人代及び発表された憲法を見まして、ほぼ予想されたとおりのものでございました。おそらく皆さんもそうだろうと思います。つまり意外性というものが、ほとんどなかったような気がいたします。つまり、周恩来が病氣だといわれますけれども、毛沢東体制のもとで周恩来や毛沢東が健康である限り、とにかく彼らが天寿を全うされるまでは、中国というああい国はやはり彼らにたよらざるを得ないことは間違いございませんし、しかも全般に脱文革なり脱政治という状況があるとすれば、そこにいわば行政官僚などが、あるいは外交官僚を含めたいわば実務派の行政官僚が、大きな地位を占めるであろうことは疑いなかったわけ

大院」「社会主義聯合院」「三つの紅旗を合体した大院」「三合紅旗大院」とか、それから「六つの団結の大院」「六合団結大院」とありました。この院子(庭)の中には、おそらく三つの家族、六つの家族が住んでいると思うのですね、そういうところが赤く門のところに紙を張りだしてあった。これはおそらく新しい町内会組織の基礎単位ではないかと思えます。しかも糊あともなまなましく、「第四期全国人民代表大会の開催を迎えよう」とも張り出してあるのですね。で、赤や緑や黄で壁にたくさん張ってありまして、これはもう何かあるのではないか、そして私も実際に二日ばかり夜、人民大会堂の回廊を回って見たわけでございますけれども、電気がやっぱりついていて、全体にはついていませんけれどもかなりのところについているわけですね。そして番兵が非常に多かったです。これはやっぱりもう何かあるなと思って、そして帰ってきましてあああいう新聞発表があったわけでございます。

そこで、その全国人民代表大会の問題に移りたいと思えますけれども、私は実際について最近見てきた中国が、ある意味で脱政治の方向にあることを強く感じました。あれほど文化大革命が叫ばれ、あれほど「批林批孔」運動が唱えられながら、ともかく表面を見る限り非常に脱政治的な雰囲気があったよっていたわけでございます。それは私がかつて文化大革命

でございます。鄧小平については、私もかつてその復権を予測した一人でございますけれども、鄧小平はまさにそういう意味で党官僚の中でも非常に実務的能力のある人物でございます。そして文革以後の実務官僚としては張春橋をあげることでできたわけでありまして。私は十全大会で王洪文が出てきたときに、これはある意味での「当てる馬」である、つまりいきなり張春橋をもつてくることにはかなり抵抗がある、つまり張春橋はご承知のように上海グループでしたから、それを十全大会のときにクローズアップさせることはあまりにも抵抗があるので、いわば王洪文という「当てる馬」を、しかもこの当てる馬は老・中・青の結合という、中国の幹部の若返りというスローガンに非常にびったりですし、その経歴からしても政治的効果という点で非常にびったりである。彼をやつぱりクローズアップさせたということは、同時にその陰に張春橋がいるということではなかったかということ、まあ当時申し上げたことがありますけれども、どうもそんな感じがいたします。

こういうふうに考えてみますと、いわばジェロントクラシといわれる老人支配体制の問題にしましても、ともかく毛・周の健在の限りは現行の体制のままていく、そしてもしもそこに万が一問題が生じたときに、やはり鄧小平がそのあとを引き継ぎ、やがて張春橋がそのあとをという暫定的な事務

引き継ぎ体制をつくったわけでして、この点でも非常に常識的な線が出たのではないかという気がいたすわけでございます。同時に憲法を見ましても、これは一部に流れていた憲法草案というものと比べてみて、大筋においては海外に流された憲法草案が正しかったことが裏づけられたわけですが、若干違うわけでございます。たとえば、前文というのがなかったのが今度はあるわけですね。それから第一章の第二条に、毛主席に関する規定がありまして「毛主席を国家元首とし、全軍の最高統帥とする」というふうに書いてあったものが、今回落とされている。これは私、やっぱり脱政治というか脱文革といましようか、どうも中国はこの間かなりある意味でいろいろな批判なり、まあ外部でわれわれがいうことについても、ある程度それを受け入れたといましようか、そういう批判が起り得る余地というものを残さないようなものをつくったような気がいたします。つまり、ある意味での毛沢東個人崇拜的な文革当時の状況というものを、ここでもぬぐおうとしたわけでございまして、しかもこれは、毛沢東を完全にたな上げにしたということではなくて、結局、中国共産党がすべての核心であるということは、その主席は毛沢東ですから毛沢東体制のもので、できるだけ幾つかの弊害を除去しようとした努力のあとがみられるような気がいたします。

一口にいつて私が今度の全人代なり今回の憲法について感があります。「反潮流」という言葉などは今回、ついにどこにも出ていません。それに対して全体の状況がとにかく平常化してきておる、そして国際関係も非常に広がってくる中国自身に、「開かれた社会」へ徐々に向かわざるを得ないというときに、いわばラジカルなイデオロギーだけを掲げるグループが凋落して、むしろ官僚体制なり実務派官僚なりが優位を占めるという、いわば当然の帰結であるような気もするわけでございます。

もう一つの重要な点は、今回確かに新聞などの報道によりますと、老・中・青の三結合、あるいは人事の若返りということがいわれるわけでございますが、はたしてそういう結論だけで見ていいのかどうか。全体的には、ともかく現状維持という色彩がかなり強いのではないかと気がします。たとえば、全国人民代表大会の常務委員長は朱徳、そして宋慶齡、董必武というような長老が副委員長になっているわけですね。それから、老齢であり病弱といわれた周恩来総理が大きな役割を演じている。演じざるを得ない。そして党のほうは毛主席という形になっていますと、やはりこれは何と云っても中核においては現状維持ということでありまして、必ずしも新陳代謝、大幅な革新というわけにいかなかったというふうにみざるを得ないような気がいたします。

この点で、問題は何と云っても毛・周以後であり、先ほど

じたことは以上のとおりですが、それでは一体そこに問題がないのかというところ、決してそうではないような気がいたします。その問題の一つは、いわゆる文革ラジカルと申しましようか、江青夫人に連なるといわれたような文革派、王洪文であるとか、姚文元であるとか、李徳生、汪東興といった人たちが今回の全人代では全くクローズアップされなかったことでございます。これについては幾つかの解釈ができると思いますが、確かに全人代というのは国家機関であっても、今回の憲法で党の一機関になりさがったわけですね。ですからここで行政官僚が表面に出るのは当然である。それから、党からもたとえば張春橋が出ているではないか、張春橋は上海グループではないか、公安部長には華国鋒、文化部長には于海永と主要なポストを文革派が握っているではないか、という意見もあるわけでございます。

けれども、ともかく江青夫人であるとか姚文元、王洪文というようなところがクローズアップされなかった、そして復権した旧幹部が大量に進出したということは、やっぱり注目していいと思います。これは、いわば「批林批孔」運動が、どうも定着しなかった、あるいは先に申しあげた全般的な脱政治の潮流と無関係ではないのではないか。この点においては、十全大会以来、「反潮流」「反復辟」をあれほど鼓吹した文革グループというもののある一定の挫折が明らかだと思

私が申しましたように、鄧小平、張春橋というような形で実務能力に秀でた党官僚への後継ラインができましたけれども、しかしながら何と云っても毛沢東、そして周恩来というような大きな存在が、もしも天寿を全うされたときにどうなるかという大きな問題は残らざるを得ない。しかも今回のように党の一元的指導というものがかなり強調されまして、従来のような国家体制と党体制の並列ではなくて、まさに完全に一党独裁になったわけですね。そういう一党独裁下の共産党が国家の面ですべてを統率するという状況になったわけですから、まあ実際にはいままでもそうだったわけですけどとにかく形の上でも完全な一党独裁になったわけでありまして。それだけに党主席、つまり毛沢東がもし倒れたりしたという場合、はたして鄧小平が全面的にそれだけの権威をにやえるかどうか、あるいは鄧小平もすでに高齢ですので、張春橋がそれを担えるのかという問題が、やっぱり出てこざるを得ない。この点でやはり現在、中国の宿命でございますけれども、問題がそこにあるわけでございまして、今回の体制も依然として毛・周以後への一種の過渡的な体制としての現状維持体制というふうに考えることができるような気がいたします。

ともかく今日の中国は、すべてのリーダーが毛・周以後への中国というものを意識して行動せざるを得ない、それだけ

に私は、毛・周体制のもとではこれ以上の大きな動揺なり激動は、どうもないのではないかと思われます。「批林批孔」運動は、考えてみますと発生的には、文革が脱文革の状況になったことに対する文革左派の抵抗であったと思うのです。にもかかわらず、結局それを徹底化しますと、周恩来さえも動揺する。周恩来を失うということが内政的にも外交的にも非常に大きな問題だということを自覚した毛沢東は、おそらくそうした動きをチェックしたように思われます。そういう状況がやはり浸透しているわけですし、そうして一般大衆の間にはもう二度と再び政治的激動はごめんだという雰囲気がある。林彪までああいうふうになり、劉少奇もああいうふうになったのですから、「批林批孔」運動でまたかという気持ちがあったと思います。それよりもとにかく生活が豊かになり、人心が安定化してゆけばそれでよい、つまり天下國家のことは「帝力いづくんぞわれにあらんや」であるという中国人の伝統的な政治観ですね、こういうのが非常に根強いのではないかと思えますので、その点である意味での安定というものが今後望まれていくのではないかという気がいたします。

そこで、問題の「批林批孔」運動でございますけれども、今回中国に行ってみて感じたことは、これは文革のような大衆運動には全くならないということでございます。しかしつたときはもう何にも買うものがなかった。中国に行つて一冊しか本を買ってまいりませんでした。今回はそのくらい本がたくさん出ている。それだけ「批林批孔」運動を中心にいけばインテリ階級あるいは幹部の間では、そういう一種の知識欲が旺盛になっていることも事実でございます。

私は、現在の中国の政治潮流というものを考えてみますと、やはり文化大革命から林彪事件以降の問題というものがなかなかつきりつかめないのは、単に外部のものだけではなくて、おそらく中国の民衆も同じことだろうと思えます。そして民衆は、おそらく脱政治の方向へこう向かいつつあるような気がするわけでございますけれども、ともかく「批林批孔」運動そのものが持っていた政治性というものは、だんだん薄らいできていくというふうに感じざるを得ない。発生的には非常に政治的なモメントがあったのではないかと私が見るのは、まあ一昨年の夏、十中全会と相前後してこの運動が起こってきたわけですけれども、このときにまず秦の始皇帝を評価する運動としてこの運動が起こり、そしてやがてそれが「批林批孔」運動につながっていくわけですけれども、この発端は次のようなところにあつたのではないかというふうに、私は一つの仮説を持っております。

というのは、ご承知のように十全大会で周恩来は林彪事件について言及して、「この事件の真相についてはもうすでに

ながら『人民日報』その他を見ますと、毎日のようにこの問題が出てくるわけでございますが、これはどうも発生的には非常に権力政治的な運動、路線闘争的な運動として始まったにもかかわらず、それが途中でブレイキがかかり、現在では一つの精神作興運動として、非常に多面的な目的をもったイデオロギー・キャンペーンに転化しているというふうに私は見ております。そしてご承知のように、今日中国自身は、いよいよ国際化時代を迎えようとしているわけですし、このことは一種の自由化の外圧が中国大陸にひたひたと押し寄せてくることになるわけですから、こういう事態に対処するためにもやはり中国民族の団結なり統一というのを改めて考えてゆかざるを得ない。

一方、中ソ関係は、最近一部に外交関係の緩和のきざしがありますがそれでも、依然として宿命的にはきびしいわけですし、そのことは今回の憲法も示されているわけで、そうしますとやっぱりこういう運動を起こし維持していくことにはマインナスはないわけで、「批林批孔」運動はそういうようなものとして今日あるように思います。今後もそういうあいまいな性格を持ちながら、いわば知的な批判運動としては続いていくのではないかという気がいたします。現に新華書店なんかにいきまして、私は百種類くらいの「批林批孔」運動に関するパンフレットや本を買ってまいりました。以前中国に行

皆さんがよく知っているのでここで詳しく言う必要はない。なぜならば五七一工程紀要によって中国の民衆は全部これを知っている」というようなことを公式の席上で発言したわけです。これは非常に大きな意味を、実は持っているのではないか。

林彪事件についてちょっと脱線しますけれども、中国ではご承知のように林彪はモンゴルのウンデルハンで死んだというのをいっているわけですね。今回私も向こうにいきました。モンゴル側にはいぶんしつこく聞いたのですけど、モンゴル側は「林彪は絶対にモンゴルで死んでない」という。例のモンツアメ通信の見解を繰り返していました。ウンデルハンというところは、ご承知のようにウランバートルから旧満州のハイラル、つまり旧ホンバイル地方のノモンハン事件のあったあたりのちょうど中間ぐらいのところにあります。モンゴル側は外交官であっても一切立ち入りできないところですが、北京の北方にあつて地理的には、中国の主長を裏づけるような位置にあるわけです。まさにウンデルハンというのはそういうところなんですけれども、そのときの飛行機はそのままになっているというのを今回聞いてきました。おそらく砂漠の中に、そのまま残骸があるのかもしれない。で、モンゴル側あるいはソ連は、飛行機はたしかに落ちたが、そこには決して林彪は乗っていなかったとい

うわけであり、このナゾは依然として解けないわけでございます。このようなナゾについてはともかくああいふ衝撃的な事件があった。そして、この『五七一工程紀要』は、皆さんもすでにお読みだろうと思えますけれども、いかに林彪があくどい陰謀家であって、毛主席をこういふふう暗殺しようとしたのだという、いわば筋書きが書いてあるものです。その筋書きが正しいかどうかにも幾つか問題があるわけですが、それでも、それはさておくとして、そこには二つの非常に衝撃的なものを含んだ文章があったわけですよ。

一つは、毛主席は現代の秦始皇帝である、つまり毛主席は専制暴君である、だから毛沢東を暗殺しなければいけないのだというふう林彪が書いていっているというふうには、『五七一工程紀要』はいっている。

もう一つは、ご承知のように、毛主席はマルクス・レーニン主義の衣をかぶっているけど、実際には孔・孟の道を歩むものであるという文章があるわけです。これは実は、非常に意味深い文章でして、しかも、そういう『五七一工程紀要』という一種のアングラ出版物みたいなものが、すでに中国民衆に流布されているということ、これはやはり非常に多くの意味を持つことではなかったかと私は思います。しかも周恩来がそのことをいっているわけですから、周恩来は少なくともそのことを流布させるのに一役かかっていると見なければなら

ないわけですね、また中国の伝統思想と非常に密接な関係をもっているということについても、否定し得ないものがあるように思われます。現に毛沢東は論語の冒頭のことばをはじめ、経書からたくさんの言葉を『毛沢東選集』の中に引用しております。私の調べたところでも、孔子の引用が多いし、特に孟子からの引用が多いわけですね。しかも毛沢東の漢籍の素養というのはたいへんなものですし、そのう『毛沢東語録』は、「子曰わく……」と同じようなものである。それから毛沢東がしばしば地方巡業するというのも、孔子がしばしば地方巡業したのと同じではないかというようなことを、中国人はどこかで感ずるのかもしれないかと。そしてまた皮肉なことに、毛沢東はかつて文化大革命のときに、紅衛兵に対してこういうことをいっている。これは「毛沢東思想万歳」の中に出てくるのですけれども、「お前たち、もう少し孔子を勉強しなさい、孔子は反動思想だなんていうけれども、彼は確かに出は没落貴族の出身であつたけれども、しかしながら孔子は民衆の中に入つていって、琴をかなで歌を歌い、庶民と一緒に論じ合つたではないか、彼は中国における対話の先駆者である、民衆と接した先駆者である」というようなことを毛沢東自身いっているわけですよ。

こうしたことからしますと、やはり毛沢東は孔・孟の道を

歩むということになりますと、少なくとも毛沢東の側にとっては、それは非常に困つたことでございます。毛沢東が秦始皇帝ではないか、あるいは毛沢東は孔・孟の道を歩む者ではないかということが、大衆の中に流布された文章の中にあるということは、これはある意味で非常にとげを含むことばでして、中国の民衆にしてみれば、あるいはどこかの奥底で感じている、あるいは彼らの心の琴線に触れることばであるかもしれない。考えてみますと、私も今回中国にいつて旧紫禁城、故宮なんかを見ましたけれども、明・清時代の中国の皇帝の権力の強さに圧倒されながら、同時に今回毛沢東が住んでいる中南海の前を通つてみると、まさにかつて皇帝の住んだ一角に、番兵が立つていて、その中に毛沢東は住んでいるわけですね。そこに毛沢東の巨大な肖像があるわけですね、考えてみれば毛沢東は最もうまい方法で明・清の皇帝以上のことをやっているというふうには、あるいは中国の民衆はどこかの奥で感じているかもしれない。そういう毒を含むことばが流されるということは、かなり大きな意味を持つたのではないかと思います。

それからもう一つは、毛沢東はマルクス・レーニン主義の衣をかぶっているが、実際に「毛沢東思想」は孔・孟の道ではないかというふうな考え方ですね。これはある意味でまたきわめて鋭い問題提起だといえないこともないわけですよ。

歩むということばも、ある意味で『さうかもしれない』というふうなところをもつわけですね、少なくともマルクス・レーニン主義とは違うかもしれないというふうな感じを与えないわけですね、こういうふうな毒を含む文章が『五七一工程紀要』のなかに林彪が書いたものとして存在し、それが大衆の間に流布されたという事実、この点については私が言うのでなくてまさに周恩来が言っているわけですから、このことが持つた意味というのは非常に大きいと思うのです。しかも当時は、ご承知のようにとうとうたる『潮流』というものが流れておりました。つまり脱文革、旧幹部の復権という潮流が、周恩来を中心としまして非常に強く流れていたと思うのです。鄧小平は復権いたしますし……。私がいも非常にうがった見方をすれば、ある意味では周恩来はそこまで考えて『五七一工程紀要』を流布させたのではないかと、つまり毛沢東体制以後の中国が、ノーマライズされる、平常化されるために、毛沢東体制のもとにおける非毛沢東化への着手として、そういうものを流布させたのではないかとも思われるのですけれども、そこまで考えるのはうがち過ぎだとしても、そういう潮流がとにかく事実として一昨年の夏までにはあつたわけですよ。そのときに出てきたのが反潮流という運動である。復辟に対して反復辟、つまり旧幹部の復権に対して反復権という運動であります。これを鼓吹したのが王洪文で

ございます。そして当時の十全大会の周恩来の政治報告と、王洪文の党規約改正報告を聞いてみると、非常にそのトーンが違うんですね。周恩来は、当時むしろ脱文革の潮流を、実際につくり出し、そして対外的には米中接近から日中国交に至る大きな外交的な活路を開こうとしたわけですが、これとはうらはらに周恩来らしからぬ演説をしまして、むしろ十全大会当時の周恩来演説は非常に防衛的というか、受け身の演説でございました。いかにも周恩来らしいところがない。それに対して王洪文の演説は、冒頭から非常に反潮流を鼓吹しまして、そしてご承知かと思えますけれども、真の共産党員は殺害されても、職を奪われても、離婚という目にあっても、追放されても、とにかく潮流にさからわなければいけないというようにことをいまして、いかにも何か林彪を追悼しているかのようなトーンさえあったのです。

私は、このころ中国の上層部に深い亀裂があることを感じましたが、そこへ「批林批孔」運動が起こってきたわけです。しかも「批林批孔」運動がまず最初にやったことは、始皇帝像のイメージチェンジですね。つまり、秦始皇帝は焚書坑儒にみられるように専制暴君だという、長い間の伝統的な始皇帝観というものを、百八十度転換させまして、始皇帝は革命君主である、彼こそ儒家の思想を根本から葬ろうとしたものであるという、始皇帝像のイメージチェンジをやったわけ

で、恩来の活動に翳りがありましたね。同時にからだの病氣という問題もあったわけですが、その病氣はあるいは政治的病氣であったのかもしれない。

しかしながら、考えてみますと実務派の体制も、そう簡単にくずれるものでなかったばかりでなく、文革以後の、そして中国が世界と交流し始めてからの全般的な状況というものは、むしろ実務派グループに対して有利な環境をつくり出していたと思います。つまり、いかに周恩来を批判しようとしても、かつての林彪や劉少奇のように、それを打倒するということとはとてもできない。もしそれをしたならば、国家自身がたいへんな損失になるということは毛沢東も十分知ったわけですし、そして「批林批孔」運動の中には逆に、今度は毛沢東側近に対する幾つかの批判というものも混在し、巻き返しとしてほかのグループがやったのだらうと思います。一番明らかな例は、最近の、去年七月の『光明日報』回収事件として、明らかに毛沢東側近体制をやゆしているような文章がそこに出ていた。

で、そうこうしているうちに、どうも両者ともに決定打がないままに、いよいよ毛沢東、周恩来の高齢化、そして次の時代への転換というところに深刻に気づかざるを得なくなる。そして大衆は、まさに脱政治という方向にいつている。こういう中で選択されたのが、今日のようないわば毛沢東体制下

す。それからその次に出てきたのは、儒家に対する系統的な批判であって、毛沢東がみずから発動し指導した「批林批孔」運動という形で、毛沢東は実はみずから孔子を批判してきているのだ、林彪こそ孔子を擁護してきたのだという運動となり、『毛沢東選集』の中にたくさん孔子を引用してあるところは全部伏せまして、林彪がいかに孔子のことが好きであったかということが前面に出てくる。ということは、ある意味で五七工程紀要の中に含まれていた二つのとげを含む文章の意味というものを、抹殺する運動、しかも五七工程紀要というものは大衆の中に流布されたとするならば、しかも林彪事件というのは中国の民衆にとって、いかに衝撃的な事件であったかということはいくらでもないわけですから、そういう運動であったのではないかという気がするわけです。そうしますと、「批林批孔」運動に火をつけた側は、その背後に周恩来批判を含んでいたのではないかと思ふ。少なくとも周恩来がねらおうとしたものとは違った反潮流を鼓吹するということは言うまでもないわけですし、去年の四月ぐらいまで、周恩来に対する暗黙の批判というものが、「批林批孔」運動の中にたくさん出ておりました。一々例はあげませんけれども、中国人のことは昔のことを用いて今を語るわけですから、そういう比喻を用いながら、明らかに周恩来批判と思われるところがありましたし、どうも周

の官僚体制の確立ということであって、少なくとも「批林批孔」運動には当初、非常に政治闘争的な面があったけれども、それはすべてで休戦し、大同団結することによって現状を維持しようという潮流が去年の秋ぐらいから出てまいりました。軍の中の大同団結もそうですし、そして党の一元化指導を貫いて、そしてきたるべき時代に備えようというような方向に、再び潮流が大きく動き始めたのではないか。その中で開かれたのが今回の全国人民代表大会であったと思うわけでございます。

そうしますと、中国自身もかなりの衆智を結集して、現在の過渡的な体制をつくったということがいえるような気がするわけですし、私はその点では一応中国の体制というものが、暫定的な安定、つまり来たるべき毛・周以後への時代の移行期としては、一応ベストのものをつくったのではないかと。ただ考えてみますと、そういういわば体制の整備という大きな成果の代償として、はたして「批林批孔運動」なりかつての文化大革命の成果が、どれほど大衆をとらえ、大衆の人間変革というところに結びついていっているかというところ、これはどうも非常に私は疑問であるような気がいたします。つまりこういうことを含めて考えますと、中国はあらゆる意味で、あたりまえの方向に動こうとしているんだというような気がするわけでございます。

そこで最後に一言、きょうの当初の演題のテーマに戻りまして、中国の世界戦略という問題でございますけれども、この場合に忘れてならないことは、今日の中国が、やはり基本的には第三世界のチャンピオンという立場をとりまして、いわば国際的な相互依存関係の増大という、先進工業民主主義国の立場とは、基本的な戦略において非常に異なったものを内部に持っているというところであります。これは、去春の国連資源特別総会における鄧小平演説にはつきりあらわれているわけです。しかも鄧小平が今後かなり重要な役割りを演じていくでありましょうから、そのことは認識しておく必要があるのではないかと思います。つまり一口に割り切って申し上げると、たとえばアラブの石油闘争を中国は非常に鼓吹する。日本は、もしも再び中東紛争が起こり、石油の値段がつまり上がったりますればたいへん困る立場にある。この違いというものを、われわれは忘れてはならないということでありませぬ。ただ、今日その違いというものが、すべてカモフラージュされているのは、ひとえに中ソ関係あるいは中ソ、日中、日ソという東アジアにおける国際関係の微妙なバランスのゆえであって、ある意味で日中友好関係の増進、そして中国は非常にいまそれを望んでいるわけですが、中ソ関係をよってそういう状況がもたらされているということは、否定できないわけでございます。ですから、日中関係でもさうい

つねに対応していかなければいけない国と、非常に自己完結的な大陸国家である中国というものは、経済戦略なり国益の上で根本的に違ったものがあるのだということを忘れてはなりません。これはたとえば海洋権の問題をとってもそうですけど、すべてにおいてさういう違いがあるわけで、このことをわれわれは十分認識した上で、日中友好関係の維持・拡大を考えていく必要があるわけでして、その辺のはめを全部はずしてしまつて、非常にベッタリした形で日中友好を考えてしまいますと、またそこに幾つか問題が出てくるような気がいたします。しかも鄧小平というような人物が、今後もしもさらにクローズアップされてくるとするならば、やはり中ソ関係の改善というような可能性も考えておく必要がある。私は基本的には一番初めに申し上げましたように、中ソの宿命的な対立は非常に深いと思いますが、にもかかわらず外交的あるいは党と党との関係での改善ということは、十分あり得ることも考えてみる必要があると思うのです。

最近の徴候は、ちょっとさういふような傾向を見せております。鄧小平が出てきたら、かつてスースロフと六三年にやり合ったのだから、おそらく両者はまた悪くなるのじゃないかというのは非常に皮相な見方でして、毛沢東の対ソ観と実権派であった鄧小平の対ソ観とは根本的に違ふと思います。毛沢東は、ソ連とは一切席を同じゅうせずという立場で、あり

う基本的な違いがあるのだということを忘れて、すべて何か同じ土俵で日中がうまくいくというふうにだけ考えると、そこに大きな間違いがあるわけでして、今日すでに日中貿易の中にも、幾つか問題が出てきているわけでございます。

たとえば石油にしましても、中国がアラブの石油闘争を鼓吹するのは、一つには中国自身の世界戦略なり、第三世界戦略というものがあつたわけですけれども、それと同時に中国自身が産油国だということを忘れてはならない。つまり、アラブの石油闘争を鼓吹することによって、石油の値段が高くなるということは中国にとつても決して不利ではない。しかも当面外貨不足である中国は、今後資源外交を展開するでしょうから、その場合に日本が中国から買う石油は非常に値段が高いわけですね。ご承知のように、一時は一バーレル十六ドル近くまでいきましたけど、おそらくいまは十四ドル五、六十セント……。たしかさうだと思ひますね。

まあ最近稲山ミッシェンなども向こうに行つて帰つてこられたばかりですが、幾つかの問題が日中貿易にもいま出ている。そして中国は、国際的な相互依存関係の増大というようなことを戦略的には否定しておりまして、それは覇権主義の立場であるというようなことをいつているわけですから、さういふ点でも、日本のように資源その他を対外的に依存せざるを得ない、そして非常に流動的なフレキシブルな国際関係まして、であるがゆえにこの実権派の人たちとたもとを分かち、実権派を批判することになった。おそらくかつての実権派の人たちは、そこまで毛沢東が対ソ敵対するのにはついていけないという立場であつたわけで、これはちょうど日本共産党の立場と非常に近いわけです。日本共産党は、劉少奇や鄧小平のことを一言も批判したことはございませぬ。「毛沢東一派」を激しく批判する日本共産党は、むしろ当時彭真であるとか、劉少奇、鄧小平というような実権派の人たちと同じベースの上で共同声明をつくらうとして、そして最後の段階で毛沢東に拒否されたわけですから。

ということになりますと、鄧小平ないし鄧小平的な人物が全国的なリーダーシップをにぎるようになれば、両共産党が再び非常に連帯的なものになる、あるいは中ソ関係がよくなるかもしれないという可能性も、同時にやっぱり無視できないような気がいたします。もちろんすぐさうなるということではありませぬけれども、さういふことを含めて、問題を広く深く十分に考えておく必要があるような気がするわけでございます。

なお、中ソ関係といひますと、今回モンゴルでたまたま中国大使館をビザの件で訪問したときに、ウランバートルで中国大使とソ連大使が会見する場面にぶつかりました。つまり中国大使館をソ連大使が訪問する現場にちよどぶつかりま

して、あるいはそれはリターンコールだと向こうは説明しておりましたけれども、そういうところを舞台上に……ウランパートルは新聞記者もいませんし、商社の人もいませんから、非常に目立たないところで、ある意味での何らかの折衝なんてことも、まああり得るような気がいたします。もちろん、今回私が目撃したのは、おそらく表敬訪問だろうと思いますけれども、少なくともそういう可変性、流動性というようなことを考えた上で、やっぱり日中関係の安定化を考えておく必要があるような気がいたします。幸い、最近日中関係につきまして、一時のようなブーム、熱狂がさめまして、冷静なものごとを考えられるようになったということは、たいへんけっこうなことだと思いますけれども、そして同時に中国自身も、そういういわば狭い形で日中関係を考えるのでなくて、より広い形で日中関係を考えはじめていると思えますけれども、いずれにしても今後の中国を大いに注目し、考えていかなければいけないと同時に、とかくその中国問題は、むしろ日中問題であるよりは日中問題ですね。日本の中にある非常に狭いセクショナルな雰囲気というようなものを、やっぱりこの際われわれ自身よく反省して、見直していかなければいけないと思います。

今回、北京に行きまして、日本の新聞者の人たち、考え方は必ずしも同じではないのですけれども、皆さん友人なもの

質疑応答

問 私は全くしろうとで政治も何も知りませんが、北京にいらして、ものはどうなんですか。安いのですか。

答 ものが安いかどうかということですね。私は今度新橋飯店に泊まりましたけれども、ホテル代などは非常に安いですね。ただ北京飯店は非常に高いそうです。これは非常にデラックスなホテルですから。市場でもどこでも全般的にもは安いと考えていいと思います。

問 先ほどですね、衛生の話が出まして、以前と比べて大分変わったとおっしゃいましたが、現実はどういうふうになっているのですか。

答 そうですね、一口に言いますととにかく人が多いわけですね。日本人の感覚でそういうことを言うのはいけないのかもしれないけれども、ともかくある意味できたない。それから、北京は昔からそうでしょうけれども、共同便所が非常に多いですね。そういうところの状況なども、非常にまあ昔のままのような気がいたしました。

問 昔のトイレはまる出しでしたが……？

答 いや、まる出しということはございません。それから、壁などはほんとうに古いままでですね。それがもう北京の町のまん中でもちょっと大通りを入りますと、ほんとに昔の

ですからいろいろ話し合い、またごちうになりました。もちろん、その人たちの報道のしかたについては、私は私なりの見解を持っておりますけれども、にもかかわらず、同じ日本人としてやっぱり意見の違いは違いとして話し合うことが必要だと思えます。ところがその中で唯一人の記者は——東亜同文書院出の三大紙の一つの記者なんですけれども——北京にかなり長い記者ですし、年輩格ですの、敬意を表してこちらから電話したところ、開口一番、中嶋先生が来ると北京の空気がきたなくなる。とこういうことを言うのですね。私はその記者と別に個人的にいさかがあるわけではありませんし、まったく心外だった。中国自身も私の入国をこうやって認めているのに、日本人の中でそこまでベッタリ、少しでも中国について自主的な批判、自主的な見方をする人を、すべて反中国であるかのように考えている日本の記者がまだいるとしたら、日中関係にとってもそれはやはり非常に困ったことでありまして、われわれ中国に対してもできるだけ率直にものをいえるような日中関係にしてゆかなければならない。そしてそういう方向を中国もだんだん欲しているのではないかと思えます。まあこれは私の期待でもありませんけれども、いささか蛇足を最後につけ加えさせていただきます、私の話を終わりたいと思います。どうもありがとうございます。

いかにもくずれかからんばかりの陋屋がまだたくさんあるわけですね。そういうところに人は多いし、まあ私は写真をとってききましたから、一番いいのは写真をお見せすればいいのでしょけれども、まあそういう状況を見まして、一方で天安門前広場なんかを見ますとですね、この断絶とかギャップに驚きます。私は戦後派で戦前の中国を知りませんから、あれほど中国が国際的にもプレステージが高くて、威風堂々としていたならば、北京の町ぐらいもうちょっとというイメージが逆にあるものですか、それに比べて非常にある意味で驚いたということですから、それに比べて非常に興味がありました。天安門前広場とか長安街とかそういうところだけではなくて、ちょっと前門（チェンメン）外の横丁のあたり入ってみられると、そうした意味での中国を素顔で知ることができると思えます。

問 これほど世界を騒がした全人大大会も、いつも秘密にやって、やってしまつてから「ああやった」というようなぐあいにはなければならんのか、そうしなければならんという、これは習慣でしょうか、それとも何かそうしなければならん理由があるのか、あるいはみんなが集っているのがわかれば、いつ核兵器でやられるかもわからないから、それで隠すのだと、冗談のような話もありましたが、ほんとうにそういう危険まで感じておるのかどうか、先生どうお考えになり

ますか。

答 それは私も、今回そういうふうな宿舎には明らかに地方の代表がきておりますのに、なぜかと思いました。おそらく人民大会堂で行われたと思うのです。にもかかわらず、それがわからないという国はやっぱりたいへんな国だと思えますけれども、それはまあ一口にいって、いかに日中友好といっても、普通のフランクな状況で相手とつき合いませんかね。アポイントメントとるだけでもたいへんだそうですね。航空で帰ってきましてね、北京発の時間が早いためか日本人は一人だけなんです。お客さんは三分の一ぐらいでしたけれども、何かの代表団なんですね。何の代表かって聞いても、全然答えてくれないのですよ。同じ飛行機の中に乗ってて、日本に行くのだし、私は北京からきているのだから、少なくとも何の代表で日本に行くかぐらいのことは答えてくれてもよさそうなんですけど、その壁はものすごく厚いですね。そこに三人アメリカ人が乗ってしまって、ちょっと聞いてみると自分たちはロスアンジェルスにいる航空会社の人間だけれども、今度北京の航空業界と三日間話してきたのだと、こんなことはある意味でかなり機密に触れるようなことかもしれないけれども率直に話してくれている。それで、実に中国というのはまだまだ壁が厚いと思えましたけれど

ど、それと同じように、その点ではまだまだ非常に壁が厚いということにして、いまのご質問に直接答えられるかどうかわかりませんが、そういうことを申し上げる以外にないと思ふのですね。しかも、あれだけの代表がどこから人民大会堂に集まったかということは、なぜですがね。どうもやっぱり、あの地下道から入ったのじゃないか、これは十全大会のときもそうでした、私はそれ以外にないと思ふのです。毎晩のように新聞記者や在外高官の人は、あの辺をぐるぐる回っているわけですからね。やっぱり地下道を通って行ったと思われる、おそらく地下道は中南海にも通じ、人民大会堂にも通じ、いろいろ通じているわけですから、そこを通過していたのではないのでしょうか。

問 先ほど、たとえば前門外ですね、小さい露路に入るときたないところがあるというお話でございますから、まあ市内は自由に歩けるんだろうと思うのですけれども、普通の料理屋に入っていくと断られるというのは、向こうの店が断わるのですか。

答 第一、さっき私があげたような料理屋というのは、もちろんと外人専用の部屋がありましてね、そこに行かざるを得ないのでですけど、そうでなくて、私が泊まっていたホテルに面した旧東交民巷のすぐ近くにも小さな料理屋がありまして、ちょっとそこに入ってみたんですね。そうすると、み

んなやつぱり奇異な感じがしまして、私が入っていくときささとよけちゃうのですね。ですから、とてもそういう状況の中では食事をするのができずに引き下がってくるのですけれども、そういうところはやっぱり現在でもそうなんであって、おそらく外人が、まあわれわれがたとえば香港の料理屋に入るような形にはいかならないと思うのですね。その点では完全に違うということです。

問 あらかじめ、ここにきたらそういうところにかかって入っちゃいかんということを指示されているわけではないですね。一般の人以外は行っちゃいけないよ……。

答 外人以外のところへですか。そういうことは、私も特に聞きませんでした。

問 ウランバートルは飛行機でいかれたのですか。

答 ウランバートルに入るのには飛行機でございます。出るときはウランバートルから北京まで汽車です。

問 まだやっぱりウランバートルまで汽車がないわけですか。

答 週に一べんだけ、モスクワからウランバートルを経て北京へ行く汽車があります。国際列車がそのほかにウランバートルー北京の鈍行が週に一本です。私ののつたのはこれでした。

問 昔は直通便が出ていましたか……？

答 そうですか、いまはソ連から汽車が出ています。問 先ほどのお話ですね、大衆のプレッシャーですね、それがだんだん強くなってきたら、強くなっているかどうかは別にしましても、そのプレッシャーが国家の政策に反映されているかどうか。その大衆のプレッシャーですね、そういうのはどういう形でそれを国に向けるか、お伺いしたいと思ふます。

答 大衆のプレッシャーというところまで大衆が自発的であるとは、私はちょっとまだいえないような気がするのです。むしろ大衆は、そういう政治の激動の世界からもう逃れようとしている、つまりそういう意味で、上から号令をかけても、もう大衆は再び文化大革命のときのように、あるいは「批林批孔運動」だからさあ、という形で熱狂しないという、そういうような気がするのですね、だから、その現実をやっぱり指導者のほうも見えていかざるを得ないんじゃないかという気がいたします。

問 それはまあそれでいいんですけど、それほどまでにやはり笛吹けど踊らずのような状況になっているのか、盛んに、まあ私ども聞くところではいろんな教育をやりまして、その教育によって統一して行くんだという、まあこのように書いたものがあるわけですね。そうしますと、それは見せかけであって、そうじゃないということ……。

答 その議論が分かれるところでですね、どうも私は後者のような気がします。たとえば八年間のあいだに中国は生活面で確かによくなっていますね。これは日本の新聞記者の人たちと話し合いますと、やっぱり「批林批孔」運動の偉大な成果と、文化大革命の成果だというのですけれども、考えてみればどの国でも八年間というのは、いまの日進月歩の時代にはたいへん大きな進歩があるはずですし、ましてや発展途上国であれば、中国のような躍進途上の発展途上国とすれば、八年間というのはそういう運動がなくても変化はあるはずです。それから中国があれほど批判してやまないソ連だって、私四年ぶりですけども、ソ連の民衆の着ているものだってすっかり四年間によくなっていますからね。この変化というのは、はたしてそういう政治運動の成果として考えることができるかどうか、私むしろそれには留保したいわけで……。ただ、むしろ政治運動の成果とすれば、常にそういうキャンペーンをやることによって全体を統一しようという、そして常に一種の評価システムみたいなものを、社会の中に貫徹させなければいけない社会である、そのためにそういう運動が必要だということは、いえるんじゃないでしょうか。

問 今回のご旅行は、ソ連、モンゴル、中国と三カ国をご訪問されたわけですが、現在のような情勢の中で、三カ国の渡航ということはそう困難なことではないのでありますか。

答 いや、それは台湾代表といえども、在外にいる台湾籍を持った代表のことです。台湾からいったということは、いままでもピンポンチームなんかで台湾代表というのは、全部アメリカにいたり、日本、東南アジアにいる台湾籍を持った中国人ということですよ。

問 先ほどのお話で、日中友好を日本の狭い国の中で考えるべきでないというお話がございましたが、ニクソンが北京にいて窓口を開きましたけど、また依然として台湾との外交関係は維持しているという、これと同様に日本の政治家でも相当たくさん台湾を訪問しているような状況なんですけれども、これを北京ではどういうふうに考えているわけですか。

答 まあ短期の旅行ですから、北京でそこまで先方の感觸を得ることはできなかったのですけれども、ただ私は、米中関係がこのところ少し冷却化しているという気がいたします。同時にこの間の米ソ関係の貿易協定放棄というハプニングにあるように、少し時期のように米中関係にしても、すぐ改善という方向に行くよりは、若干あとに戻ったような気もいたします。そのことは、同時に中ソ間の微妙な安定化といえましょうか、私今回国境を通ってきましたけれども、国境での中ソの軍事緊張という雰囲気はありませんでした。国境を越えても人民解放軍の姿は全然見えませんし、ソ連のほうはモンゴルに基地があるわけですから、たくさんソ連兵が

それともたいへんな抵抗があるけれどもあえて両方行くとか、あるいは片一方だけであきらめなければならぬ状況にあるのか、ということを知りたいのですが。

答 その辺はぜひぶん質問を受けるものですから、率直に申し上げますとですね。かなり困難だと思います。私は、日本を出るとき三つの国全部にいられるとかどうかわかった上で日本を発つたわけではなくて、あらかじめ外務省なり大使館を通じて、私の渡航目的とかパスポートナンバーを伝えておきまして、そういう努力はしたのですけれども、モンゴル側は少なくとも中国に行くということを前提ではビザは出さないと 생각합니다。これは非常にむずかしいような気がいたしました。よっぽど特殊なケースでなければ。であるがゆえに、モンゴルの国境を出るときに、実はきょうお話しましたけれど、盛んにそのことをしぼられまして、約二時間ぐらい税関でたいへな目にありました。中国側も私がモンゴルから入ればフロックで入れるんじゃないかと、お客が少ないわけですからよけい目立つわけですね。それだけに中国側も私の入国については、十分承知のうえで許可してくれたわけにして、そういう配慮がありました。それは、ある意味で国交回復の成果だといえるかもしれません。

問 新聞で拝見しますと、人民大会に台湾代表が十二名か何か……、これはやっぱり正式の代表なんですか。

いますけれど、それはあたりまえのことであって、特にいまそこで、たとえば『デイリーテレグラフ』というイギリスの新聞が十二月ごろ伝えたように、モンゴルで中ソ衝突があったということはおそろくないと思うのですね。もともと、私に通った時ほんとうにあの広大なゴビの砂漠をある一日一線だけ通ったにすぎませんからそれだけではわかりませんけれども、中ソ関係の将来についてはいま非常に注目すべき段階にきているんじゃないかという気がいたします。たんに国境をはさんだ中ソの軍事的対峙ではなく、よりグローバルな国際政治全体のなかでの中ソの戦略の交錯がみられるようになるのではないかと思います。

(本文は一月二十日の会員・会友定例午餐会における講演記録である)

講師略歴

生年月日 昭和十一年五月十一日

出身地 長野県松本市

最終学歴 昭和四十年、東大大学院国際関係論課程卒業

専門 国際関係論・現代中国学。

著書 「現代中国論」、「中国文化大革命」、「中国をみつめて」、「中国像の検証」、「現代中国と国際関係」ほか著訳書多数。

霞山

昭和四十五年四月二十八日第三種郵便物認可
昭和五十年四月一日発行(毎月一回一日発行)

通巻第九四号

霞山

中国の新しい体制と毛沢東以後

第 94 号

財団法人 霞 山 会